The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「三」の文化記号論的考察 : コスモロジーの形態を中心に
Author(s)	杜, 勤
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29181
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【 2 】

氏　　名	杜（と）　勤（きん）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　12671　号
学位授与年月日	平成8年8月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科　言語文化学専攻
学位論文名	**「三」の文化記号論的考察** **ーコスモロジーの形態を中心にー**
論文審査委員	(主査) 教授　深澤　一幸 (副査) 教授　宮川　清司　　助教授　北村　卓

論文内容の要旨

数はものを量的に規定する記号としての役割を持つだけでなく，(多くの場合一桁以内の数は)またある法規や文化現象を象徴する簡易にしてなお且つ有効な方法でもある。これらの数は単なる計量的な表現としての領域を越えて，なんらかの象徴的価値を体現するものとして観念されていたように見受けられる。それ故に，この数的象徴体系を正しく理解することができれば，それは古代中国社会の各文化現象の特質を理解するための端緒を提供することになると思われる。本研究では，古代中国研究にあたって従来から用いられていた文献学的方法を採用し，卜辞，先秦，漢代のものを主とする文献資料から着手し，さらに文化人類学的な考察を加えて，古代思想に最も重要な関わりを持つであろうと思われるコスモロジーの形態という視野から「三」の文化記号的機能と意味を探ってみた。つまり，「三」を足がかりに，古代文明の体系の原型を復原し，その根底に潜む根源的思想性を追求しようとしたものである。

無論，数は物の多少を示す概念である。しかし，我々の実生活に生きる数は実数の範疇を越えた「虚数」的なところがある。中国文字は象形文字から発生したものであり，今から約3300年前の甲骨文字まで遡る。まず，中国記数文字の歴史を辿り，その字形の変化過程を他の民族のものと比べ，解析した上で，比較対照の角度からその背景にある中国人の数観念，特に「三」に託される「虚数」としてのイメージを見出し，さらに「六書（漢字の構成原理の六種の型：象形・指事・会意・形声・仮借・転注)」における「虚数」としての「三」の位置付けと機能を考察し，それを次のようにまとめてみた。

a　単純加算の限界値

b　数の最初の一区切り

c　最小限の多数

d　漢字構造上の安定性と美飾機能

中国の文献史料には，「三皇五帝」「三拝九叩」「三綱五常」「三公九卿」「三才」，「五行」，「四象」，「八卦」のようにさまざまな数値が定型的に記録されている。これらの数値は単なる事実の羅列という域を越えて，なんらかの象徴的価値を体現するものであると理解すべきであろう。これらの象徴的価値を持つ数の中で，その倍数を含め，「三」の出

現頻度が最も高いと見受けられる。そこで，中国伝統社会の各分野における「三」の運用の諸相を概観し，中国人古来の方位概念における中心定位の角度から，奇数式と偶数式という人間の持つ二種の基本的認識類型の相異を考察してみた。さらにその上で，宇宙生成の原理など，古代思想の根幹にかかわる「三」の重要な意味と機能との究明を試みてみた。

宇宙空間への分解にはいろいろな型があるが，二分割と三分割はあらゆる分割法の基本を成している。従って，分割された宇宙空間の枠組は二極構造と三極構造がその最も基本的なものである。この二つの構造は人間の空間思考の最も基本的形態が概念化されたものであると思われる。さらに偶数構造列と奇数構造列を比べてみると，前者は常に均等に分割されるのに対して，奇数構造列には常に分割が不可能な「中」に対応する「一」を含めているという違いが出てくる。奇数構造列は偶数構造列に「中」という要素を加えたものであり，中心存在型の世界観であると言える。この場合の「一」は混沌未開と呼ばれる原初的状態の象徴数としての「一」とは異なり，それはつねに単一のままにとどまりながら，そこに一貫してつきまとうイメージは中央に位置するコスモスの根本である。なお，偶数構造は常に分割原理を果たすのに対して，奇数構造は常に偶数構造への統合原理を果たすのである。その上，奇数構造に見られる統合原理はすべて三極構造に帰着することができ，三極構造は総合原理を示す最も根源的なものである。

三極構造による総合原理は古代中国の宇宙生成の法則にも反映している。『老子』四十二章の「道一を生じ，一二を生じ，二三を生じ，三万物を生ず」が記す宇宙生成論では，なぜ万物の生成数として「三」にこだわるのか，それは「三」に至って，はじめて「沖気」を中心に陰陽両気を配した三極構造が完成し，沖気が陰陽二気に調和をもたらし万物が生成していく条件が整い，そして万物は万物として存在し，機能することが可能であるからであろうと考えられる。従って，この宇宙生成論の図式ないし老子思想の基本的パターンは三極によって構築されたのである。

古代国家を創立するに当たって，真っ先にやらなければならない大事は朝廷王宮の中心定位を完成することであった。中心定位は単に地理的な優勢を示すのみならず，自己主体性の顕示，世界の王者への帰属，コスモスの確立など，精神活動においても重要な意味を持つ。「中」は宇宙観念の根幹にかかわる重要な意味と機構を担った鍵概念である。そして「三」は「中」の概念を示す最も基本的な単位数であり，中国古代思想の根源を再現する象徴数である。

「中」は中国文化に占める地位と役割は極めて大きいものである。「中」の初文について，古文字学界では一般的にはトーテミズム名残——旗竿の象形と解され，その字形は「中」と「中」の二種類がある。そして，「中」と「中」からは如何にして，中正の概念が形成に至ったのかについて，代表的な説は目印説，日陰説，射鞠・盛器説が挙げられる。そこで，宗教的神和の立場から中正の概念の成り立ちを考察してみた。旗（中・中）の真ん中を貫く縦線を神と人間を結ぶ，形而下の宇宙軸として，守護霊は「｜」を伝わって降下し，「○」で示す区域を依代とするものと考えてみた。それによって，従来の三説の統一を図ろうとした。旗という移動式の宇宙軸は，古代の人々にとって旗はカオスからの脱出であると同時にコスモスを確立し，人々の精神世界を組織化，秩序化させ，霊の存在を身近に実感できるという重要な意味を持つものである。このように，中・中は単なる時空的「中」のみならず，人間と神を垂直に結ぶ世界軸であり，古代の人々の精神的な拠り所である。天・地，神・人を繋ぐ「中」の具体的な表象は神との交信の手段たる古文字に姿を顕現し，神話伝説においても「中」のコスモロジカルな異態（バリアント）の共時的な観察が可能である。このような宗教的人間，神話的世界の「中」の概念は人間の世界への認知形態にも受け継がれている。これは，つまり「中」によって二項の対立を中和し，「参和」を実現し，両者間の最も望ましい選択を導き出す論理的思考である。この観念はさらに形而上学的に拡大敷衍され，理念化されて，政治的倫理，行動上の規範であり，中華思想の神髄である中庸思想へと転化していったものと考えられる。

続いて，殷墟卜辞，『易経』に基づいて最古の実在の王朝，殷王朝における人々の原初的宇宙像を考察し，さらにそれが周代において点・地・人三才という明確なモデルに定着するまでの軌跡を辿り，宇宙論的表像である鼎の三足のシンボリズムの形成の原理を検証し，上古の宗教文化生活の形態とその変遷過程を明らかにしようとしてみた。

殷代は自然神の全盛の時代であった。人々の上に君臨し，人間界のすべてを支配する神は唯一神ではなく，汎神であり，神々は自然の隅々まで浸透し，自然神は天地そのものであった。そのため，山川草木，花鳥虫魚はすべて神格を認められ，神として崇拝されていた。殷代は農耕神（河）と牧畜神（岳）とによって，その生活が営まれていた。

そして，殷代には天地の自然的概念も発生しなかった。卜辞に見られるように，天界を支配するのは，上帝と呼ばれる至上神であり，帝は日月星辰，風雲雷雨などの自然神の，農業を主とする社会生活に対する影響力を総括し，それらをある抽象的意志の作用に帰納した産物であった。そして地も河・岳・帝と相並んで人格化された神的対象として捉えられており，天と共に物的自然としての属性を持たず，人格を与えられていた。

周代の観念世界は殷代のものと著しく異なってきた。汎神論的原始宗教は理性化，世俗化へと発展するにつれて，神格化された自然は次第に神秘性が薄まり，天地の自然自身としての属性，つまり物質的一面が認識されはじめ，一種の素朴な唯物論，自然哲学的宇宙的観念が台頭してきた。易を貫くのはこの素朴な唯物論的思想であり，天地間にあるのは様々な実在的な物質にほかならないとしていた。そのために，天帝や自然，祖先が人格神の生活を持ち，人間の世界を支配する原始宗教的宇宙観念はこの時代には影を潜め，天地自然は抽象的法則体であると位置付けられ，人間生活の秩序を宇宙自然界の法則に求めるという天人相関，天人統一観が思想界を支配し始めた。こうして天地とその法理に則る人を合わせて，天地人三才の三位一体の宇宙観が定着したのである。その中，天地人三才における天地は原始宗教の自然神から分離した物質的概念であると言わなければならない。人天統一観における人は天地自然の秩序に人間生活の規範を求め，自分の当面する運命を打開することができるから，ある程度の自主性が認められるであろう。この点でも，社会生活の全般がすべて神の意志によって支配される原始宗教における全く受動的な人と区別される。

そして，新石器時代に，実用的な原因によって発生した鼎の三足が三公を象るという宇宙論的ジンボリズムの形成について，その形成時期は天地人三位一体の宇宙観が確立した周代であると推定すべきであろう。鼎足は易の卦爻の構造及び卜占法と共に，周代の人々の宇宙的観念の表象と見るべきであろう。

次に老子の宇宙進化論「三生万物」にいう弁証法的思考を神話伝説を通じて考察した。中国の神話伝説において対立する聖俗両域の統一は第三極の融合作用によって実現するものである。宗教的儀礼における祓浄，人身供犠，動物供犠などのような象徴的死は俗なるものが聖なるものへの移行を意味し，人間としての条件を放棄し，聖への回帰を図るための試練として人に課せられるものであった。そのために，より高い次元への再生を目的とするこの死は聖俗を繋ぎ止める媒介軸のような性格を有するものである。天地分離以来，人間と神の交流はある特定の，非日常的な場所でしか行われなくなり，伝説中の世界の中心に位置する崑崙山，天柱，建木，扶桑等世界軸は天地・聖俗両域を連結し，人間と神の交流を可能にさせる第三の軸と考えられよう。なお，太古の昔，社会，宗教活動の中心としての「社」は地上の人間と天上の神が対面できる神聖な場所であり，「社」を媒介に天・人・地という三極立体構図が築きあげられたのである。「社」に屋根を設けないのは「受霜露風雨，以達天地之気」ということを図ったものである。世界各地の動物誌象徴体系において，蛇は人類の対立面，邪悪の代表と位置付けられることが多いが，このマイナス的価値しか与えられていない蛇は中国伝統文化においては龍へと神化され，太陽と同等な価値が与えられ，最高統治者皇帝のシンボルにまでなった。これは龍という神意に通暁する霊界動物は天地両域の動物の属性を一身に集め，「上凌雲気，下入深泉」，時空を越え，変幻自在することができるからである。一方「真龍天子」と仰がれた帝王は天の地上における形而下の姿として，天地の徳に参与し，陰陽の調和を促進する。したがって，天子は天地・聖俗を連結する第三の媒介軸であると言えよう。そのために，王なるものは人工的宇宙模型である明堂において太陽の運行に見習い，循環的に居所を変更し，時宜に適した儀式を行い，人間社会の秩序と平和の確保を図ろうとしたのである。

最後に老荘の「無」の思想を主軸にしつつ，河合隼雄の中空均衡論のメカニズムを明確にし，さらに日本文化における「三」の位相を検証してみた。河合氏は構造論的分析によって，『古事記』神話の神々の中心に無為の神を持つという一貫した構造に着眼し，この中空構造を日本神話の構造の最も基本的な事実として取り上げ，この構造は日本人を基礎付け，日本人の思想，宗教，社会などを支える根底として存在していると指摘している。この理論は無為の中心によって相反するものの共存が許され，絶対としてのバランスが保たれるという中空均衡モデルと理解されているが，ここは老荘思想の「無」の宇宙観，価値観の流れを引くものである。神の無為性は最高の宇宙的理念の「道」を得てこそ，「天網は恢恢として，疎にして失わず」の威力を発揮することができ，日本神話の中核を為すことができたのである。そして，固定した価値判断を持たず，弾力的，流動的であり，あらゆる変化に対応できるという点におい

て，中空均衡モデルと中庸思想とには大きな接点があり，さらに対立する二項が「三」の求心力によって一元化（均衡の達成）されるという老荘の弁証法的展開の原形は中空均衡構造にも反映されているのである。なお，中空均衡モデルと「無」とのこのような接点は神話における神と人間の位相，和風の建築様式や書画における「無の芸術」などの特質を考察するにあたっても，有力な手がかりになっている。強いていえば，「無」は日本神話を貫く中空構造を構築する底力ともなっており，日本人の思想形成に大きく寄与したものと思われる。

論文審査の結果の要旨

本論文は，古代中国研究では従来から用いられてきた文献学的方法により，卜辞・先秦・漢代などの文献資料を分析するとともに，さらに文化人類学的な考察をも加えて，コスモロジーの形態という視野から，古代では単にものを規定する記号としてのみならず，なんらかの象徴的価値を体現するものと考えられてきた数，ここでは「三」の持つ文化記号的機能と意味を探求した力作である。

現在の中国，さらには台湾・香港をも含めて，哲学研究の視点からでさえ，数，とりわけ「三」の持つ象徴的意味あいを追求した研究はきわめて少ない。それに文化人類学の視点からアプローチしたものは，より稀であろう。それゆえに，本論文は，古代中国での「三」に全く新しい光をあてたともいえ，この分野において大きな功績をなしたといえよう。

さて，本論文では，全六章にわたって，きわめて大きな視野から精細かつ大胆に，「三」のコスモロジーを論じている。第一章では，ローマ数字などとの比較もこめて「三」の持つ意味を分析し，第二章では，主に中国の古代思想によりつつ数概念を分析し，第三章では，「三」ときわめて重要な関係を持つ「中」の概念，第四章では，「三」の展開の形である天・地・人を解明し，第五章では，中国の神話伝説から三極構造をとき，第六章では「古事記」などにみられる日本文化内の「三」の位相を，老荘思想の「無」や河合隼雄氏の「中空構造論」との対比を中心に論じている。

本論文は，きわめて自然な日本語によりつつ，全体の構成がきわめて堅固に構築されている。各章の結論は，おおむね資料を充分に読みこんだ上で出されており，説得力に富むものとなっている。

もちろん，本論文にはいくつかの欠点もある。主なものは，その視野がどうしても中国，日本といった東アジアに限定され，西洋への目くばりが乏しく，結論の普遍性があいまいなこと，また先行研究への言及に著者の評価が入らず，その結果，著者自身の見解が時にははっきりしないことなど。

しかし，全体としていえば，本論文は，これまで限られた中国古代哲学研究の中でたまに言及されるにすぎなかった「三」の持つ意味あいを全く新らしい視野から再解釈することに成功しており，今後の研究者が必らず参照すべきすぐれた研究であることは疑いない。審査委員会は本論文が学位請求論文として充分価値あるものと認定するものである。